「壁」と「橋」と「平和論」

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　平田　雅己

二〇一七年一月二〇日、アメリカでトランプ新政権が誕生した。トランプは就任演説の中で、今後さまざまな形で「壁」をつくる意思を改めて表明した。その翌日、全米から約五十万人の人々が首都に集い、ベトナム戦争時代以来となる空前規模の反政府抗議集会が開催された。世界各地でも同様の抗議活動が行われ、この一日だけで計約四百八十万人が声をあげたという。参加者が掲げるプラカードの中で「壁ではなく橋を（Build Bridges Not Walls）」の文字が印象的だった[1]。特にヨーロッパの主要都市では、橋の欄干にこの文字が記された横断幕を設置する示威行動があちこちで見られた。今から約三十年前、ヨーロッパの人々は社会を分断する「壁」の不毛さを悟り、それに抵抗し、それを打破した。ベルリンの「壁」の崩壊はその象徴だった。

二〇〇一年九月一一日をきっかけに新たな「壁」が世界中で次々とつくられていった。当初低かった「壁」は徐々に高くなり、我々の日常を圧迫し、不寛容な空気が社会に広がっていった。先ほど触れた一月二一日の出来事は、「壁」を打破し「橋」をつくるために、世界の人々が連帯する新たな時代の到来を告げているのかもしれない。

「壁」と「橋」。このメタファーを私に最初に意識させてくれたのは、ミュージシャンのジョン・レノンである。一九七四年にリリースされたアルバム Walls and Bridges. 邦題は『心の壁、愛の橋』。この邦題をつけた当時のレコード会社の担当者に直接会って話をきいてみたい。そう思うほどにこの邦題はジョンが遺した全音楽作品に通底するメッセージの核心をついている、と私は今でも思っている。アメリカからの国外退去命令や訴訟などで精神的に疲弊したジョンが、ビートルズのメンバーやパートナーのヨーコからも初めて完全に離れて製作したのがこの「ソロ」アルバムだった。ジョンは当時、この原題について「壁は君を守ってくれるかどうかはさておき、とにかく君を閉じ込めておくものだけど、橋はどこか別の場所へ君を連れていくものなんだ（Walls keep you in either protectively or otherwise, and bridges get you somewhere else）」と語っている[2]。

自分が現在置かれている状況に照らして、この「壁」と「橋」を意識すると何が見えてくるだろうか。例えば、自分が関わる大学の授業についてイメージするならば、次のように表現できそうだ。つまり、トランプが軽視する歴史につながる「橋」、トランプが恐れる異なる他者に接近する「橋」、そしてトランプが捨て去ったように見える普遍的な理想に至る「橋」、こうした「橋」を受講生に提供する授業を心がけていきたい。永遠のテーマになることは間違いないが、トランプの出現で「トランプ的なるもの」を再認識させられた私が目指すべき授業像である。他方で正直にいえば、世の中に存在する他の学びの機会と比較し、「授業」には様々な構造的制約があることは否めない。だが、発想次第でそれらの「壁」を乗り越える余地がまだあると現段階では感じている。特に本稿で触れる「平和論」に関していえば、担当者も予期しない展開が今後生まれるかもしれない、というほのかな期待がある。

（一）後期教養科目「現代社会5（平和論）」における今年の試み

本年度の「地域視座の平和学習及び平和実践に関する共同研究」班（代表者・平田、菊地夏野、阪井芳貴、山本明代）における最大の課題は前年度に引き続き、オムニバス形式の後期教養科目「現代社会5（平和論）」の授業開発である。一昨年に刊行した編著書『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ―ほんとうの平和を地域から』を活用した新たな平和学習授業、具体的には、著書で提示された広義の平和概念と実践方法の多様性を受講

生にどこまで意識させ行動へと導くことができるのか、という課題への対応である。前年度の授業評価の中に『ナゴヤ』のさらなる積極活用とより多くの『ナゴヤ』関係者の登壇を求める受講生の声が数多くあった。

昨年初頭、菊地、阪井、山本と検討した結果、今年度は『ナゴヤ』関係の特別講師の数を思い切って五名から九名に増やす試みを行うことにした。今年度の授業展開において、特別講師登壇回の内容は以下のとおりである。

・第三回
「戦争と平和の資料館ピースあいちについて」
ピースあいち事務局長の宮原大輔さん
（平田司会）

・第四回
「ピンポン外交と日中関係」
名古屋テレビの村瀬史憲さん
（平田司会）

・第五回
「『はだしのゲン』が中国を駆け巡りたい理由」
フリーアナウンサーの坂東弘美さん
（平田司会）

・第七回
「戦後沖縄の歩みと沖縄差別」
命どぅ宝あいちの会の新城正男さん
（阪井司会）

・第八回
「平和を演じる
―平演会の三十年」
劇作家のなかとしおさん
（平田司会）

・第十回
「朝鮮女子勤労挺身隊への取り組みと支援活動について」
挺身隊訴訟を支援する会の高橋信さん
（山本司会）

・第一二回
「ハルモニを撮り続けて」
写真家の安世鴻さん
（菊地司会）

・第一三回
「放射能汚染からの避難体験」
あゆみ R.P.Net の井川景子さん
（平田司会）

・第一四回
「服部夫妻と銃社会アメリカ」
YOSHII の会の服部政一、美恵子夫妻
（平田司会）

講師はすべて名古屋地域在住で、それぞれ平和活動の実績を持っている方々ばかりである。彼らの話に耳を傾けることによって、受講生はこの地域で戦後育まれてきた平和の文化を理解し、自分たちの平和実践のあり方にまで思いを馳せることが期待されている。トピック選びにあたって特に留意したキーワードは（一）「戦争との向き合い方」（第三回～第一二回）、（二）「東アジアの平和」（第四回、第五回、第十回、第一二回）、（三）「構造的暴力の理解」（第七回、第一三回、第一四回）、（四）「文化アプローチの可能性」（第三回、第四回、第五回、第八回、第一二回）である。（一）に関しては、主に日本が経験したアジア太平洋戦争の記憶を念頭に、高校までの「平和教育」に欠落している戦争の加害性や、個の視点で戦争責任を考える機会を提供する。（二）に関しては、今日の日中・日韓関係の対立・緊張状態を念頭に、過去の歴史を直視しながら真の和解を達成する方策を考える機会を提供する。（三）に関しては、「戦争がなければ平和といえるのか」という問いを念頭に、沖縄問題、原発問題、米国の銃問題など通じ日常に内在する暴力要因について考える機会を提供する。（四）に関しては、デモ、集会、投票といった一般に認知されている直接的な政治参画手法以外にも、展示、スポーツ、漫画、演劇、写真といった日常的な文化媒体が平和意識を醸成する上で有効である点を実感してもらうことがねらいである。全体を通じて受講生に考えてもらいたい再重要テーマは「暴力を緩和・解決する手段としての非暴力の有効性」である。

今回、講師に対しては事前にこちらから以下のような要望を示した。（一）悲惨な暴力の現実を受講生にしっかり伝えつつも、それだけに留まらず、そのような状況を緩和・解決する平和創造の主体になるためのヒントを受講生に伝授する、そのようなイメージで話の組み立てを準備してほしい。（二）九十分の授業時間のうち、最初の六十分程度を話に、残りの三十分程度を受講生との対話の時間にあててほしい。具体的な方法はおまかせする。（三）運動の現場と異なり教室には様々な考え方の学生がいる。また教養科目という性格上、必ずしもこの分野に強い関心をもっている学生が集っているというわけではない。そういう多様な環境を考慮し、結論ありきの一方的な押し付けにならない語り口を心がけてほしい。これら

の要望はひとえにこれまでの「平和教育」分野の先行研究や、平田が実施した受講生対象アンケート調査の結果に基づいている。

本稿では特に（二）について受講生のリアクションペーパーから判断し好評だったと思われる興味深い実践例を紹介したい。

第八回のなかとしおさんの授業では、二人一組がペアになって向かい合い、互いの人差し指を合わせて、言葉を使わずに互いの表情のみを手掛かりに、同じ方向に互いの指を動かしていく活動や、安全カミソリを手に持つことをイメージしながらそれをゆっくりと目の中に入れる動作を受講生に実践してもらった。こうした演劇手法を通じ、一体一のコミュニケーションや他者への想像力が平和創造の基本であることを受講生に実感させた。

第一三回の井川景子さんの授業では、浜岡原発事故を想定した避難シミュレーションが行われた。一見すると通常の防災訓練のように思えるが、原発事故の場合はそう簡単にマニュアル化できない。放射性物質拡散の不確かな情報が氾濫する中で、最終的には政府を頼りにできず、自分で判断して行動するしかない。そのあまりの過酷さから、逆に原発の存在そのものへの疑念を惹起させる。実体験に基づいていることもあり恐ろしいほどリアルであった。

第五回の坂東弘美さんの授業では、彼女が昨年、台湾で刊行した漫画『はだしのゲン』中国語版を中国大陸出身の本学留学生三人に事前に読んでもらい、授業当日に感想を披露してもらった。この実践の発案者は実は坂東さんでも私でもなく、この回を取材した中日新聞の安藤孝憲記者であった。日本人の受講生たちは自分たちと異なる戦争の加害に着目した彼らの視座から学ぶことが多かったようである。第一二回の安世鴻さんの授業でも感じた点であるが、このようなアジア人同士の平和対話の機会を今後も意識的に作っていきたいと考えている。

今年度の授業に関する受講生の総合評価は本原稿執筆時点でわからないが、今回の授業展開を観察する中で見えてきた新たな授業の姿がある。それは一言でいえば「授業のコミュニティー化」といえるのかもしれない。『ナゴヤ』の巻頭言において「平和な街こそ、住みたい街」というスローガンを記した。この地域に居住する大学生、大学人、市民が対等の立場で平和について語り合い学び合いながら、柔らかくつながる関係性を疑似体験する空間。今後その性格をさらに強めることができれば、「授業」というよりも「タウンミーティング」のようなイメージに近づくのかしれない。

（二）中京大学教員とのミニシンポジウムの開催

今年度の活動のもう一つの大きな柱は、この地域で平和学習を実践している大学人との連携である。昨春、中京大学の教員が中心になって編著書『教養としてのジェンダーと平和』（法律文化社）が刊行された。『ナゴヤ』と同様に本書が教養科目でのテキスト使用を念頭に置いていることから、教養としての平和の学び方という点において有意義な意見交換の場が設定できるのではないかと感じた私は、編者の金敬黙さん（平和学）と風間孝さん（ジェンダー研究）にコンタクトをとり、そこに菊地が加わる形で何ができるか協議した。その結果、この四名がパネリストとなるミニシンポジウムを開催することになった。

一一月二八日、中京大学ヤマテホールにて一般公開のミニシンポジウム「今、大学で平和を学ぶ意義とは？」が開催された。月曜の夜、しかも肌寒い日であったにもかかわらず、一般市民、学生、著書関係者など五四名が集い、アットホームな雰囲気の中、オープンな意見交換が行われた。構成は二部構成で第一部が『ナゴヤ』と『教養』の合評会、第二部は二つの大学で実際に行われている「平和論」授業の内容を踏まえた方法論に関する議論が交わされた。

第一部では対象文献の価値と課題が指摘された。金さんは『ナゴヤ』に関して「地域と世界を結びつける書籍として大変興味深いが、若い読者を念頭に置くならば、もう少しベーシックな説明を盛り込むなど書き方の工夫が必要だった」と評価した。菊地は『教養』に関して「平和とジェンダーという異なる二つの視座から身近なトピックについて論じる手法は類書がなく興味深いが、『ナゴヤ』と比較し歴史的な考察が不十分という印象を抱いた」と評価した。金さんの評価を受けて、平田は授業開発を念頭に振り返ると、『ナゴヤ』はトピックをやや盛り込みすぎたかもしれないと反省し、風間さんは菊地の評価を受けて、『教養』は実験的な試みであったがゆえに苦労した事情を説明した。金

さんは二つの書籍に共通する課題として、本が益々売れない時代にあって、どうすればこれらの本を多くの人々に読んでもらえるのか、という本質的かつ切実な問いを私たちにつきつけた。私はジョンのImagineの中にある予言的な歌詞に触れながら（Imagine no possessions）、本に限らず人々が昔に比べて物を「所有」しなくなった時代の変化を指摘するに留まった。出版文化の行く末を案じてテキスト指定にして受講生に買わせるか、それとも受講生の懐具合を案じて参考文献扱いに留めるのか。そこに教育的配慮という要素が加えると誠に悩ましいジレンマとなる。「国家の政策を容認する教材作りは望ましくない」（金）という点においてはパネリスト全員の認識が一致した。

第二部の「平和論」授業のあり方についてだが、実際には第一部の議論とかなりの程度重なるものがあり、全体の議論を通じて明らかになった名市大と中京大の「平和論」の共通認識について以下に箇条書きでまとめておきたい。第一に、「平和論」という科目は個別の専門領域というよりも、生きるための教養として必要な科目である。第二に、「平和論」には「正解」がなく、その点で「正解」を求める傾向がある理系学生も受講する教養科目として、「平和論」を設置する意義は大きい。第三に、これまでの小・中・高の経験から「平和教育は説教臭くてつまらない」と思って入学してくる大学生の認識を変えるために、「平和論」の授業担当者は伝え方を工夫しなければならないし、理論的には「構造的暴力」論を超える新たな概念を創造する意気込みが必要である。（この点に関し、私は人間の「欲望」を暴力要因として位置付けられないものかと考えている。）そして最後のポイントとして、名古屋には平和を考える素材があるにもかかわらず十分に生かされていない現状があるので、この地域の教育者は今後も様々な連携を模索しながら、地域固有の平和学習の体系化を目指すべきである。

菊地が提起した個別トピックの教え方など今回十分に議論を深めることができなかった課題がいくつかあった。これらについては次年度以降、情報交換できる別な機会を設定できればと考えている。

今年の「平和論」受講生の一人がこんなコメントを書き残した。

「何をしたではなく、何を感じ、何を考えたのかを聞きたい」

今の若者は私が若者だった時以上にリアルな関係性を求めている気がしてならない。様々な暴力にさらされた他者の痛みを想像するという、精神的にきついこの「授業」であるからこそ、本科目の担当者は「教員」という立場から離れて、一人の「人間」として受講生と向き合う必要があるのかしれない。大変なことはいうまでもないが、試みる価値は十分にあると思っている。

「壁」をこわし「橋」をつくるために。

『はだしのゲン』を中国語に翻訳した坂東さんを話す中国人留学生＝名古屋市瑞穂区の名古屋市立大で

はだしのゲン 中国人留学生「共感」

翻訳 坂東さん、名市大講義

原爆投下前後の広島を描いた漫画「はだしのゲン」を初めて中国語に翻訳したフリーアナウンサー坂東弘美さん(六〇)＝名古屋市天白区＝が二十七日、名古屋市立大（同市瑞穂区）の教養科目「平和論」に講師として招かれ、翻訳の経緯や中国との関わりを語った。中国人留学生らも聴講し「戦争を憎んだゲンの姿に共感した」と感想を伝えた。（安藤孝憲）

坂東さんの父親（故人）は日中戦争に従軍。戦争、そして中国と向き合う中で、金沢市のグループが二十年前に始めた「ゲン」を名国語に翻訳するプロジェクトを知り、積極的に関わるように。

「戦争はひどかった、だけで終わらせない作品。世界中に伝えたい」と思ったと振り返る。

北京のラジオ局で働いた経験を生かし、九年前に翻訳を開始。二〇一三年末に全十巻を訳し終えた。長く出版社が見つからなかったが、今年六月、台湾の出版社が単行本として世に送り出した。「次は中国本土でも」と熱っぽく目標を語った。

約百人の受講生の中に、いずれも同大学院人間文化研究科で学ぶ中国人留学生の何韻さん(三四)、胡多聞さん(三四)、秦瓊さん(三三)の姿もあった。事前に中国語訳の「ゲン」を読み、講義の中で感想を述べ合った。

何さんは「日本は戦争加害者としての顔もあるけど、多くの日本人も悲しく苦しい戦後を生きたんだと分かった。中国で祖父母に聞いた話を思い出した」。胡さんも印象に残ったシーンに、戦後のゲンたちが食べ物もなく惨めな生活を送った場面を挙げ「戦争で犠牲を払うのはいつも普通に暮らす人たち」と力を込めた。

秦さんは、もともと日本の漫画が好きで「中国の同世代の友人にもゲンを薦めたい。日本も平和と友好を望んでいることが必ず伝わると思う」と話した。

講義を終えた坂東さんは「自分の使命をより強く思い返すことができた。ゲンが結んでくれた今日の出会いに感謝したい」と喜んだ。

中日新聞 2016年10月28日付朝刊

［注］

(1)「五〇万人、トランプ・ノー」『中日新聞』二〇一七年一月二三日付朝刊

(2) Nicholas Schaffner, The Beatles Forever, pp. 173-74.

被害者、誰でもなり得る

原発事故 避難者、名市大で講義

二〇一一年三月の東京電力福島第一原発事故で栃木県那須塩原市から避難してきた美容師の井川景子さん(三四)＝名古屋市西区＝が十二日、同市瑞穂区の名市大で学生百人に講義し、事故前はほとんど原発の存在を意識していなかった自身の体験を踏まえ、「誰でも原発事故の被害者になり得る」と訴えた。

福島第一原発事故の発生当時を振り返る井川景子さん＝名古屋市瑞穂区の名古屋市立大で

井川さんは愛知県への避難者でつくる「あゆみR・P・Net」の代表を務めている。平田雅己准教授の「平和論」の授業に特別講師として招かれた。

那須塩原市は福島第一原発から約百キロ。事故当時、四歳と生後七カ月の娘を育てていた井川さんは「母乳が放射能に汚染されているのでは」と不安になり、「ごめんね、ごめんね」と泣きながら母乳を与えた経験を紹介した。

同年六月に愛知県に避難した後、長女は心的外傷後ストレス障害(PTSD)と診断され、精神安定剤を処方された。「あの時の胸が焼きつくような悔しさは忘れられない」と話した。

講義の終盤で、井川さんは「どのくらいの放射線量、汚染で避難しますか」「布団は外に干しますか」などと学生に問い掛け、原発事故への対応に想像力を働かせるよう呼び掛けた。

受講した人文社会学部一年の青山巧実さん(一九)は「明日はわが身と考え、原発事故や地震災害に目を向けていくことが必要だと思った」。講義後、井川さんは「避難生活は続いており、原発事故はまだ何も終わっていない」と話した。(立石智保)

中日新聞 2017 年 1 月 13 日付朝刊

「平和」とは 日中の学生語る

名古屋市立大生・中国人留学生 「はだしのゲン」題材に

漫画「はだしのゲン」を主題に中国人留学生と感想を話し合う授業が27日、名古屋市立大(名古屋市瑞穂区)であり、学生ら約100人が参加した。

平田雅己准教授らによる教養科目「平和論」の授業で、この日は今夏に台湾でゲンの中国語訳を出版した坂東弘美さん(68)＝同市天白区＝が講演。出版までの苦労や、支えてくれた中国人の仲間たちを紹介。「反日感情を持つ人だけじゃない。中国の人々の様々な姿を知ってほしい」と述べた。

はだしのゲンを読んだ感想を話す中国人留学生ら＝名古屋市瑞穂区

同大の中国人留学生3人も参加。修士1年の秦瑗さん(23)は「日本は戦争の加害者だと思っていたが、国民は悲惨な思いもしたんだとわかった」と発表。「頑張って生きるゲンさんに感動した」

日本の学生からは「日中間で原爆の認識が異なることに驚いた」という意見が相次いだ。大学1年の八重尾徹さん(20)は「どこの国でも戦争が嫌だという思いは一緒だと思った。歴史に目を背けずにいたい」と話した。

朝日新聞 2016 年 10 月 29 日付朝刊